

中華人民共和國における国語科教育

— その一 「小学語文教学大綱」の本文について —

森 本 正 一

わが国の学習指導要領に相当するものが、中華人民共和國における「教学大綱」であり、国語科学習指導要領にあたるものが、「語文教学大綱」である。

プロレタリア文化大革命の終熄後、この教学大綱が出され、それによって新しい教育が実施されていることは耳にしてきた。しかし、外部の者には伺い知ることのできないものであり、教科書さえも外国人が入手することはできなかった。

しかし、近來の急速な雪どけによって、それを瞥見することは許されるまでになったが、その全文については伺い知る由もなかった。筆者の北京大学日本語科の専門家であるという地の利によって、ようやく全文を紹介することができるようになった事は、中日兩國の教育文化の交流にとっても慶賀すべきことといえよう。

従来、他見を許されなかった理由は、次の事がらにあると思われる。

第一は、これは「試行草案」であって、まだ確定したものでないこと。すなわち、プロ文革中の歪みの是正が熱心に行われているのが現状であり、その是正は、小学五年・中学五年（初中三年・高

中二年）という学制の変更にまで及ぼうとしている。すなわち、小学校を六か年にするか、それとも高等中学を三か年もしくは四か年制にするかが論じられているのが現状なのである。これは国語等の各教科の内容にも大きく影響する根本的な条件であり、したがって、ここ当分は「試行草案」の状態が継続するものと思われる。

第二は、これも第一項に関係することであるが、社会主義国家においては、確定したものごしか公表されないという慣行がある。次第に各階層の意見を吸収消化して成文化されたものでないと、公表される段階には至らない。このあたりの国情の差があるのである。「教学大綱」は、一九四五年の中国解放後最初のものが作られ、それによって整った教学体制のもとに教育が進められていた。しかし、一九六六年のプロ文革の発動とその進展にともなって、旧教学大綱は廢止され、教学大綱のない時期が引き続いていたのである。一九七七年のプロ文革終熄によって、新教学大綱の編修が行われ、一九七八年二月に、試行草案の第一版が刊行されている。

二

今回とりあげる「小学語文教学大綱」は次のような体裁になっている。

全日制十年制学校
小学語文教学大綱
(試行草案)
中華人民共和国教育部制訂

目	録
一 教学目的和要求	2
二 教材編排原則和方法	3
三 識字・写字教学	4
四 閱讀教学	6
五 作文教学	9
六 基礎訓練	12
七 大力改進小学語文教学	13
各年級的具体教学要求	15

△裏表紙▽には、人民教育出版社出版、北京人民出版社重印、北京市新華書店發行、北京印刷一廠印刷、一九七八年二月第一版、一九七八年六月第一次印刷、定価〇、〇八元などが記載されている。

全部で二〇ページ、本文のみで一七ページの小パンフレット型のものである。各ページは二三字二三行で組まれている。横組み。

本文にはいる前に、約二ページを費して前書きが書かれている。それには、現時点の社会主義新発展の時期において、建設のための人材が必要とされ、その人材は基礎的に小学校で養成される。小学校の重要な教科は国語であり、四つの現代化のためには国語の学習が重要な意義を持つ——といった趣旨のことが述べられている。紙幅の都合でこの部分は省略して、次の部分から翻訳によって紹介したい。なおこの翻訳には、北京大学日本語科の大学院生諸君の援助があったことを付記して、感謝の気持ちを表わしたい。

中国の国語科教育を我国のそれとを比較して、大きくとりあげられることは、その識字教学と、作文教学であるといえよう。しかしこれらについては稿を更めて論述することとし、今回は翻訳紹介によって研究者の利便に供することを第一義とした。

以下に掲げるものがその翻訳である。

一 教学の目的と要求

小学校国語教学を行うには、毛主席の偉大な旗印しを高くかかげ、毛主席の思想体系を完全に、正確に貫徹し、年少の時から児童のプロレタリア世界観の養成に重きをおかなければならない。こういう指導的思想は、小学校国語教学全般に体现されなければならない。小学校国語教学の目的は、児童の「識字」(字を覚え、「看書」(本を読み)、「作文」)の能力を培い、的確且つ鮮明な、そして生き生きとした「文章の風格」の初歩を養成することにあり。

小学校国語教学で要求されることは、児童が基本的に「常用漢字」を身につけ、初歩的な「閲読」および「写作」(創作まで含んだ作文)の基礎をつくり上げることである。具体的にいえば、つぎの点である。八注(一)内は筆者の注記。「」は原語を示す。

1、「漢語拼音」を身につけ、これを以て「識字」や標準語の学習を助けること。

2、三千前後の「常用漢字」を覚え、常用語彙を身につけること。

3、鉛筆およびペンで字を書き、毛筆でも字を書けるようにすること。

4、字引を利用できること。

5、少年児童むきの本および新聞を読めるようにし、その主要内容が分り、初歩的な分析能力を持つこと。

6、簡単な短い「記叙文」および常用の「応用文」(実用文)が書けること。その文章は、思想性は健康、中心思想は明確、内容は具体的、「条理」がはっきりし、語句がスムーズで、文字はきれいで、誤字・別字はできるだけなく、常用の記号は正しく使用できることが要求されている。

二 教材編纂の原則と方法

編纂原則の：1、小学校国語教学の目的及び要求達成に役立ち、政治思想教育と国語知識教学との弁証法的関係を正しく反映すること。2、小学校国語学習の法則に符合すること。すなわち聞く・話す・読む・書くの間の内面的な関連及び字・語・文・文章の間の内

面的な関連に気をつけること。選ばれた教材の表現は規範に合い、文体も豊富多様であること。3、児童の年齢特徴及び受容能力に基いて、易から難へ、浅から深へ、具体から抽象へと順を追って次第に高めること。

編纂方法：1、初めの三か年の講読課文に出た新字に対しては、二種類のことが要求される。一部分は掌握すべき漢字であるが、他は漢語拼音によってその字音が読め、また文の中にあるその意味が大体わかればよい。後で再出の時、教材の配置によってまた掌握するように要求が出される。このようにすれば、割合に豊かな内容のある課文を選び得るし、児童の閲読能力を高めるにも役立つ。教材の中には適当な図や画を配置し、図及び文が共存共榮するよう努めるべきである。2、課文は三種類に分かれる。「講読課文」と「閲読課文」と生徒が自学する「独立閲読課文」とである。すべて教科書中に明示される。その課文総数における割合は、低年級から高年級へと、第一類の課文は、逐年次第に減少し、それに反して、他の二種類は逐年適宜増加して、高年級では、三種の課文はそれぞれ大体三分の一ずつの比例となる。後の二種類の課文を適当に増すことは児童の自学能力を養うことに有利である。3、課文の内容的要求と読み書き訓練の必要に基き、二・三課おきに課文の後に「基礎訓練」と言う読み書きの総合的練習を入れる。4、教科書の各冊ごとの巻末に全て「生字表」(新出漢字表)を附し、その表には、各課文に出た掌握すべき新字を列挙し、また漢語拼音で発音をつける。

三 「識字」(字を覚える)「写字」(字を書く)教学

「識字」は「閲読」や「写作」(作文)の前提である。

小学校段階では常用漢字三千くらいを身につけさせる。初の三年に二千五百字位を習得し、四・五年級でのより速い読み書き能力を高めるための基盤にするのである。

識字教学においては、字音を正しく読め、字形をはっきり認識し、字の意味を了解し、学んだ語句の意味が分り、またその大部分を使用え、漢字の基本筆画・筆順規則・偏旁部首と「間架結構」(字配り)を掌握することが要求される。

識字教学は方法を改善し、質を向上させなければならぬ。児童が事物を認識する法則、国語を学習する法則及び漢字自身の法則を基にして、識字の方法を教え、識字の能力を高めさせ、漢字の音、形、義の三者を緊密に結びつけて教え、特に字形をはっきり認知することに力を入れて指導しなければならぬ。学習した漢字が閲読や作文練習によく現われるように努め、運用を反復して、学ぶことと使うことを結びつけるべきである。

字引きを引くことを教えることは国語自学能力を養成するための重要な措置で、真剣な態度で行わなければならない。児童になるべく早く音順と部首による檢字法を身につけさせなければならない。

漢語拼音は識字及び標準語学習に役立つ効率的な道具であり、漢語拼音の作用を充分發揮しなければならぬ。また、漢語拼音の重視と、学習とは、将来の漢字拼音化実現の基礎となるであろう。小学校一年級には、児童に子音、母音、アクセント、綴り方及び一ま

とまりの音節を身につけさせ、二年級には、字母表、大文字を教え、漢語拼音で字引を引くことを教える。以後の各年級では引き続き、識字・正しい字音・標準語学習・注音されたよみものの閲読などにおいて漢字拼音をよく利用させ、字典を引く習慣を次第につけさせ、次第に自学能力を養成すべきである。

字を書くことと識字との関係は緊密である。だから、児童が鉛筆とペンで字を書けるようにする必要がある。正しい筆の持ち方・写字姿勢で、文字は正確端正に書き、一定の速度を持って、行を整えて書き、紙面をきれいにし、文房具を大切にするといい習慣をつけさせなければならない。

「写字教学」においては、写字に関する基本知識を教え、漢字の各種の筆画や字配りの書写方法を身につけさせ、易から難へと進めなければならない。先生の字体は模範であることを要する。

毛筆書写を児童に教えるべきである。筆の使い方や教え、なぞり書きから臨書まで、次第に児童の書道の能力を養成すべきである。

児童に書道の重要な意義を自覚させて、みずからすすんで多く書き多く練習し、毎日書道を練習することを習慣化させるべきである。

四 「閲読教学」(読むこと)の教育

閲読教学の任務は児童の本や新聞を読む能力と真剣に読書する習慣とを養成することである。

閲読能力の養成の面では、小学段階の具体的な要求は次の通りである。習った常用語彙を把握し、正確に流暢に感情を入れて課文を朗読でき、相当程度に熟練して課文を黙読でき、指定された課文を

暗記または「復述」(大意を自分のことばで述べること)できること。課文を段落に分ち、中心思想を概括できること。少年児童に適する書物や新聞を読みとり、それらの主な内容がわかり、初歩的な分析能力を持つことができること。

閲読能力は一年生から養成し、次第に順を追って進め、一步一步と高めるべきである。

語彙の教育を重視し、児童が正確に課文の内容を理解し、語彙の量を増し、かつその正確な運用をたすけるべきである。

語彙教育は三つの方面の内容をふくむ。第一は正確に新出単語を読みとり書き出すこと。第二は語彙の意味がわかること。第三は話しことばと書きことばにそれを正確に運用できることである。

語彙教育は重要なことである。児童のわからない語彙及び文章の中心思想に対して、重大な役割のある語彙をはっきりと解説してこそ、はじめて文章の思想内容を深く理解することができる。語彙の解説はできるだけ簡単明瞭かつ確實適切で、わかりやすく、実際と結びつけてやるべきである。児童が上下の文と結びつけて語彙の意味を深く理解する能力を一步一步と養成すべきである。

教師は児童が語彙を運用することの指導を重視すべきであり、児童の運用中の語彙に対して確實適切に理解させて、かつそれをしっかりと把握させるべきである。

教師は多様な方法をとって、児童の新鮮活潑な語彙累積をたすけ、かれらに豊かな語彙を運用して、正しく自分の思想を表現伝達することを習得させるべきである。

朗読と黙読を強化すること。朗読と黙読は、閲読教育で、もっと

もつねに行われる、もっとも重要な訓練である。

朗読には、まず正確に読むことを要する。標準語で読んで、発音がはっきりしていて、字を読みまちがいがなく、読み落さず、読み添えなくて、歌う調子で読むことなく、字や文を重複して読むことのないように読むべきである。正しく読む基礎に立って、なめらかに読むことを要求し、そしてなめらかに読むことから、感情を入れて読むことと要求する。それぞれ同じ語調にならないように朗読し、語と語、文と文、段落と段落の間の置きかたを読み分け、軽重緩急に注意すべきである。感情のある朗読は児童の形象思维の能力を伸ばすことができる。児童の朗読能力がだんだん高まるにつれて、課文の内容に対しての理解もだんだん深めることができる。したがって、教師が各年級に対しても、正確に、なめらかに、感情を入れて朗読することを指導すべきであるが、ただ、要求の程度はそれぞれちがうだけである。

黙読の場合は、児童に注意力を集中させて、課文の内容を理解し、課文中に提出した問題を分析し、逐次に真剣に閲読する習慣を養成させる。

黙読は、生徒がすべてある程度の朗読能力を持っている基礎に立っておこなうべきである。黙読する場合、声を出さず、指で指ささないで読まなければならない。年級の高まりにしたがって、黙読のスピードも逐次にはやまり、黙読後課文の主な内容を話すことができ、かつ教師の提出した問題に答えることができるようにすべきである。

復述を重視すべきである。復述は児童の口頭表現能力と論理思维能力を養成することができる。児童に標準語で課文の一部または全

文を復述させる。その際声ははっきりして、言葉がなめらかで、中心があり、筋がはっきりしなければならぬ。多様な方式をとって、順序を追って復述練習をすべきである。

暗記を重視すべきである。暗記は、児童に課文を理解させ、閲読の能力を高めさせることができるし、児童に課文中の言葉と文を了解させ、文章全体の按排の内的つながりを了解させ、児童の作文能力を養成し高めることができる。

課文の「解説」に巧みでなければならぬ。課文解説の場合、児童が言語や文字を通じて、みずから正確に課文の思想内容を理解するように教師は指導すべきである。また思想内容を理解した基礎の上に、逐次どのように読書し作文することを学ぶかを指導する。

課文の解説は、それぞれ違う学年に対して違う要求があるべきである。低学年では、文字・語句・文の教授及び朗読指導などを通じて、児童の課文内容の理解を助ける。学年の高まるにつれて、中心思想を表現する重要な言葉、文及び段落をつかみ、課文全体の順序構造をつかむことに逐次注意すべきである。児童を助けながら、課文内の各部分の間の内在的つながりをはっきりわからせ、一部分ごとの内容と文章全体との内在的つながりをわからせて、初歩的に、文章はどのように言語を運用して思想を伝えるものかをわからせるべきである。課文の解説は、またそれぞれ違った体裁で違った教授法をとるべきである。八「解説」は原語では「講解」。

段落の大意を概括することは、実は課文全体を一つの簡単な作文メモに要約することになる。これは論理訓練の一種であり、生徒に作者がどのような順序によって材料を按排するのかわからせ、段

落と段落とがどのようなつながるのかわからせることができる。段落の大意を概括する場合、必ず段落ごとの中心をつかむべきであり、言葉は簡潔であるべきである。

課外読書の指導を強化すべきである。課外読書は児童の読み・書き能力を養成し高めるのに重大な役割を持つ。教師が課外読書を指導する際、児童に適する有利な読物を選んで、児童の視野を広めるべきであり、読書の方法を教え、読書活動を組織し、読書効果をチェックして、生徒の読書興味と真剣な読書習慣を養成すべきである。

五 作文教学

作文は児童の思想水準と文字表現能力との具体的なあらわれであり、文字・語句・文・文章の総合訓練である。

小学校は記叙文を書くことを主とし、また、常用の応用文（実用文）を書くことを習得すべきである。

作文はすなわち、児童が自分で見たり、聞いたり、考えたりした意義のある内容を文字で表現していくものである。児童の生活が豊富であるほど、作文の内容も充実する。教師は作文教育と結びつけて、計画的に児童を組織して見学・訪問などの活動をし、実際に触れて、児童の観察と分析を指導すべきである。作文教育は児童の言葉の使い方、文作り及び文章構成の能力を養成するばかりではなく、生徒の事物を観察し分析する能力をも養成すべきである。この二種の能力を一年生から注意して養成し始めるべきである。図を見て文を書くことは、作文の最も初歩的な訓練である。

作文教育は、話すことから書くことへの順序によって、容易なも

のから難しいものへ、簡単なものから複雑なものへと次第に進み、逐次に要求を高めるべきである。図を見て話すことから図を見て文を書くことへ、それから課題作文へと順次にやるべきである。一文を書くことから一段落を書くことへ、それから一編の文章を書くようにやるべきである。しかも話すとき書くの両者はきっぱりとわけはけない。交替してやるべきである。

小学校段階の作文の要求では、各学年にそれぞれの重点がある。一学年の要求は完全な文を話し、書くことである。二学年の場合、一歩を進めて文の訓練を強め、話をし、書く場合、文の通じることと文の前後のつながりのなめらかなことを要求する。三学年には段落のはっきりしていることと筋のはっきりしていることを要求する。四学年には、中心が明確であることを要求する。五学年は全部の要求に達すべきである。この五年を通じて思想健全、内容は具体的、用字の間違ひのないことを要求しなければならない。

作文教育では、児童に対して書く訓練をすることを重視するとともに、初歩的に確実・鮮明・生動的な文章の風格を養成すべきである。具体的に言えば、作文中に逐次、次の諸点に達することを要求する。①具体的な内容を持つべきこと。一段の話をし、一つの文章を書き、或はあることを他人に知らせ、或は自分のある考えを伝えたいなら、これらの事がらや考えを書き出して、架空の話をしない。②真実を求むべきこと。文・一段落乃至一章をかくとき、自分の書きたいと思う事情をそのまま書き出すべきである。③読者を考えること。作文するとき、この文章は誰に見せるものであるかを考えるべきである。例えば、欠席届を書くのは先生に見せるためのも

のであり、壁新聞の原稿を書くのは同級生に見せるためのものである。④用語の選択に注意すること。一文・一段落を書く場合、どのように書けば自分の伝えたい内容を確実にいきいきと書き出すことができるかを考えるべきである。適当な言葉を使い、適当な表現方法をとるべきである。言葉の規格化を注意すべきである。⑤前後のつながりを注意すべきこと。いずれの文章も冒頭・中間・結尾がある。この文章の中心はなにか、この中心をめぐって、まずなにを話し、次になにを話し、最後にはなにを話せば、他の人が読んですぐにわかるかを考えるべきである。⑥書きおわったら直すこと。通じない文がないか、言葉づかいの不適當なところがないか、字の間違ひがないか、符号づかいの間違ひがないかなどを注意しなければならない。一句一句を読み進めて、文章を少しでも良くなるように直すべきである。

作文教育は閲読教育と結びつけるべきである。閲読教育には、どのように材料を選び、組織し、どのように中心を確定し、どのように正確に語句を選んで、流暢な文を書き出し、どのように段落と段落をつづけて文章を構成し、かつ前後の対応を注意するかなどを児童にわからせるべきである。作文教育の場合、児童が閲読中に習得した知識と技能を活かすことを指導しなければならない。

作文教育では、また生徒に多く練習させなければならない。魯迅が「文章はどう書くべきか、私は言えない。それは自分の作文が、多く見て練習することによって出来たのであり、この外にはなんの心得や方法もないからである。」と言ったことがある。多く看るとは多く読書することを指す。それから多く事物を観察することをも指

す。すなわち「周囲の事情に気をつけること」である。多く練習することは、作文練習の回数を増すばかりではなく、毎回の作文がある程度の質に達することも要求する。教育中、計画的に作文を按排すべきである。「基本訓練」で作文に提出している具体的な要求は、必ず達しなければならないものである。この外に、教師がいろんなチャンスを利用して、児童の自覚を促し、児童の潜在力を発揮させ、多く書かせて、逐次書く習慣を養成させるべきである。

題目を出して作文させることは、教師が真剣に題目を考えて出さなければならぬ。題目は啓発性のあるもので、児童が考えて筋を展開させることのできるものでなければならぬ。題目は児童の生活の実際にびつたりと合い、かれらが書く内容を持つものであるべきである。

作文への指導、批評及び講評を重視すべきである。作文の事前の指導は、主に児童の作文興味を啓発することであり、作文の要求をはっきりわからせ、作文の考えの筋を展開させるのであり、児童が材料を選択し組織することを指導することである。教師が作文を批評する場合、児童の進歩を見つけて、それを激励して、適当に指導すべきである。作文中の一般的に存在する問題に対して、閲読教育と結びつけて講評することができる。

六 基礎訓練

「基礎訓練」をする目的は、色々な形の「作業課題練習」によって、初歩的に言語文字の一般活用法則が分り、読み書き能力を育成するためのしっかりした基礎をつけるように、学んだ国語知識と

技能を復習し、強固にすると同時に、総合的に活用することにある。実践を重要視し、多く読み、多く練習することは、毛主席の一貫した教えであり、わが国の伝統的な国語教育によって立証されたりばな経験でもある。基礎訓練はこの精神を貫かせるべきである。課ごとについている「作業」に関しては、その課の内容及び表現方法を理解し、その課で学んだことばを復習し、強固にするものである。

二、三課ごとの後にある「基礎訓練」は、国語という基礎的道具を身につける要求から、計画的に作った総合的訓練である。基礎訓練は、浅から深へ、簡単から複雑へ、具体的なものから抽象的なものへ、感性から理性へとように、入念につくられている。各学年の訓練は、重点がうきばりにされており、基礎訓練の各項目間には、相互連絡も注意されている。

基礎訓練の内容は、課文と緊密に結びついたものであるが、しかし、相対的な独立性を持たせるべきである。児童の考えを啓発し、彼らに興味をいだかせ、その積極性と創造性が発揮できるように、読み・書き能力を育成するのに役立つような、多様ないきいきとした形式をとるべきである。小学校段階の各学年の基礎訓練に関しては、一、二年生については文字勉強を強化することを重点にすると同時に、ことばと文の訓練をする。三年生については、ことばと文の訓練を重点にし、文を連ねて段落にし、段落を連ねて一編の文章にすることを重要視し、普通見られる標点符号の活用訓練をする。四年生については、文の訓練を継続し、一篇の文章の構造を重点とする。五年生は、文章構造と作文練習を重点とする。

基礎訓練の中で、関連する文法や修辭の練習をすこしいれ、論理

訓練を意識的にする必要がある。文字と言葉の練習においては、言葉の觀念を強めさせ、常用語彙の精確な意味を身につけさせ、同義語、反義語の分類と比較をする。文の練習においては、文の意味が完全なものになっていくかどうか、文中の語彙が精確に使われているかどうかを重要視する。文章構造の練習においては、いかに文を連ねて段にし、段を連ねて、文章にするかに注意する。さらに文章の構造、その始め、中間、結びが内部的に連絡し、前後が繋がること、話や作文は中心をめぐって表現し、重点を突出させること、話や作文が精確に、筋道が立つだけでなく、いきいきとしたものにする事など、これらが分るように児童を啓発する。

七 小学校国語教育をおおいに改善せよ

「教学改革の問題は、主として教員の問題である。」教師は教育経験を総括し、教育方法を真剣に研究し、国語教育をおおいに改善し、教室での教学の質を始終向上させるべきである。

注入式をやめて、啓発式を採用する。啓発式教育は児童の主動的な精神を發揮させることにある。教師は、児童の学習の積極性と自覚性をよく誘導し、生徒をして、頭を働かして、問題を分析し、問題を解決するように児童を啓発すべきである。

知識と技能との関係をよく調整する。知識は分るか分らないかというところであるが、技能はできるかできないかということである。

教師は知識をはっきりと説明し、重点と難しい所をはっきりと説明する。多く説明することなく、ポイントをつかんで、説明することである。つっこんで説明することなく、しっかり身につけさせ

ることである。おおいに読むことと練習することによって、知識を技能にするように児童を指導すべきである。

児童の能力について正しく推測し、教師は児童の国語能力を調査・研究して、心の中でそれをしっかりと把握すべきである。比較的小くれている児童に対しては、教師は指導を強化し、彼らの進歩を励ますのである。比較的進んだ児童に対しては、教師はより高い要求を出し、彼らの才能を發展させるべきである。

児童の自学能力の育成を重要視する。閲読課文に關しては、教師は如何に閲読するかを児童に指導するだけでよくて、時間をかけて説明する必要はない。「独立閲読課文」に關しては、教師は大胆に児童を自分で閲読させることで、その後、適当に閲読効果を調べる。次第に自学の習慣をつけさせる。各学年の教育要求に従って、辞書類使用の習慣、予習と復習の習慣、真剣に宿題をやる習慣、教師がなおした後で、自らすすんで改める習慣、及び常に新聞を読み、ラジオを聞く習慣の養成を重点にする。

授業と授業外の関係をよく処理すべきである。小学生に關しては、授業と授業外とは、授業を主にする。教室における授業を強化し、各時間の授業をよく教えるべきである。放課後の閲読、作文練習を強化する外、学校の統一的指導の下に、計画的に三大革命運動に児童を参加させるよう導くべきである。これによって、幼い時から社会と接触させ、労働を愛させ、国語教學活動を豊富にし、作文練習の内容を充実させ、効果的に国語教育の質を向上させ得る。各項目の教育活動をする時、きびしく要求し、刻苦学習を激励し、また児童の健康に關心を寄せ、宿題の負担を重くしないようにする。

児童にきびしく要求すると同時に、教師は自己にきびしく要求し、身をもって範を垂れる。授業中に、お話、朗読、文字を書くときなど、いずれも示範的な作用をしていることに注意する。教師はおおいに政治を学習し、業務を真剣に研究し、常に創造をし、国語教育の質を向上させ、共産党から委託された光榮ある任務を完成するよう奮闘しよう。

各学年の具体的要求

一 年 生

① 漢語拼音の子音母音、声調、拼音と一体化して読む音節を学び、またそれらを書くこと。標準語を学習する。

② 七〇〇前後の文字を身につける。要求としては、字音を正確に読み、字形をきちっと知り、字義を掌握し、学んだ言葉の意味を知り、その大部分を使用できる。筆画の名称、筆順規則及び学んだ字の偏旁冠脚を身につける。鉛筆で字を書き、正確に、きれいに書き、書く時の姿勢を正しくし、筆の持ち方を正しくすることができる。

③ 正確に、流暢に、感情をこめて、課文を朗読し、暗誦する。教師の指導の下に、閲読課文がわかるようにする。

④ 正確に問題に答えることができる。図をみてお話をし、整った一文のお話から、連なった幾つかの文の話をし、学んだ言葉を活用して書面で文づくりができる。図を見て、一文乃至数文の話をし、欠席届けが書ける。〃、〃、〃、〃、〃、〃、〃、〃、〃、〃及び〃の〃の使用を学習する。

二 年 生

① 漢語拼音の字母表を身につけ、順に従って暗誦し、字母を「黙写」し、大文字を知る。続けて標準語を学習する。

② 一、〇〇〇字前後の文字を身につける。要求としては、正確に字音を読み、字形を知り、字義を掌握する。学んだ言葉の意味を知り、その大部分を使用できる。鉛筆での習字を続けて練習し、正確に、端正に、きれいに書くように要求する。下学期より、毛筆での練習を始める。字引のひきかたの練習を始める。上学期には、表音順序によるひきかた、下学期には偏旁冠脚によるひきかたを学習する。

③ 正確に、流暢な、感情をこめての課文の朗読と暗誦を学習する。課文の黙読の練習を始める。教師の指導のもとに、「独立閲読」を学習し、注音文字付きの児童読物がよめ、内容がわかる。

④ 正確な問題が解答でき、簡単なものごとを口頭で述べられる。学んだ常用言葉を活用して書面で文づくりができ、一段落の話、乃至簡単なものがたりを図をみて話すことができる。申請書、メッセーじ、簡単に短い日記がかけられる。〃、〃、〃、〃、〃、〃、〃、〃及び〃の使用を学習する。

三 年 生

① 漢語拼音を強固にし、続けて標準語の学習をする。

② 八〇〇前後の文字を身につける。要求としては正確に字音を読み、字形を知り、字義を掌握する。学んだ言葉は意味が分かり、

その大部分の活用ができる。比較的うまく鉛筆で字がかけ、ペンでの習字を始める。正確に、端正に書くように要求する。毛筆での「描影」の練習を始める。字引のひきかたを続けて練習する。

③ 正確な、流暢な、感情をこめた朗読と暗誦ができる。要求に従って課文の黙読ができる。児童読物がよめる。課文を段落にわけるところを学習し、各段落のあらすじを述べ、課文の主要内容の概括を練習する。

④ 筋道立てて物事を口頭で述べる。詳しい課文復述ができる。壁新聞の原稿、「決心書」及び通知がかけられる。課題作文を開始し、簡単に短い叙述文章の練習をする。要求としては、思想は健康で、内容は具体的で、すじが比較的是っきりしており、文が比較的通じること。〃、〃と〃〃の使用を学習する。

四年 生

① 続いて漢語拼音を強固にする。続いて標準語の学習をする。
② 三〇〇前後の文字を身につける。学んだ常用語彙が理解、活用できる。続いてペンで字を書き、正確、端正、きれいに書ける。毛筆での「臨帖」の練習をする。字典の引きかたの練習を続けてする。△注「描影」は敷き写し、「臨帖」は手本を見て書くこと▽
③ 正確な流暢な感情をこめた課文の朗読と暗誦ができる。課文の黙読ができ、課文毎段の大意と中心思想の概括ができる。少年児童読物がよめる。

④ 筋道立てて、中心のはっきりした話を、ある出来事について述べる。簡単明瞭な課文復述を練習する。普通の手紙等応用文章が

かけ、簡単に短い叙述文章の練習を続ける。要求としては、思想的に健康で、内容的に具体的で、すじが通り、文が通じており、清書がきれいで、誤字・別字をかかないように注意し、学んだ符号の使用ができる。〃、〃と〃〃を知り、〃……の使用を練習する。

五年 生

① 漢語拼音の強化を続ける。標準語の学習を続ける。
② 二〇〇前後の文字を身につける。学んだ語彙が理解・活用できる。ペンでの習字を続け、正確、端正、きれいにでき、並びに一定の速度を持つ。筆での「臨帖」の練習を続ける。比較的熟練して字典の使用ができる。

③ 正確、流暢、感情をこめた課文の朗読と暗誦ができる。黙読の習慣をつける。課文の各段落の大意と中心思想の概括ができる。少年児童の朗読に適合する本と新聞がよめる。その主な内容が理解でき、初歩的な分析能力を持つ。

④ 筋道立てて、中心を明確にして見聞したことを口頭で述べ、自己の考えを述べる。創造性をもった課文復述の練習をする。簡単な読書ノート、会議の記録などができる。簡単に短い叙述文章がかけられる。要求としては思想的に健康で、中心が明確で、内容が具体的で、すじがはっきりしており、文が通じており、書きかたがきちっとしており、あやまった文字がでないように注意し、十種類の常用標点符号(。、？、！、、：、：、：、：、：、：、：、：、：、：)の使用ができること。〔昭55・2・10〕

(本学学校教育学部教授)